
デジモンテイマーズ あらたなる闘い

辻井 真夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンテイマーズ あらたなる闘い

【Nコード】

N4162T

【作者名】

辻井 真夏

【あらすじ】

デ・リーパーとの戦いから1年、啓人たちは中学生になった。そして、留姫の突然の失踪。原因はデジタルワールドにあるとしたヒュプノスは啓人たちをデジタルワールドへと送り届ける。留姫を救うため、そして再びパートナーと出会えることを望み再び啓人たちはデジタルワールドへと向かう。けれど一年ぶりのデジタルワールドはもはや悪の巣窟と化していた。四聖獣さえも頼れぬ中。

啓人たちは留姫を救うことができるのか

第一話 プロローグ（哲人の場合）

デ・リーパーとの戦いから1年、僕たちは中学生になった。

留姫とはまた違う学校になったけど、僕らの関係は変わらない。

ギルモンホームにあった僕が見つけたデジタルワールドは山木さんたちが危ないからとギルモンホームをふさいでしまった。

あれから何も変わらない、たまに会っても相変わらず留姫は意地っ張りだしそして何より僕たちはいつか必ずギルモンたちに会えると信じている。

でもあれから、一つだけ変わった事がある。

それはあれから変わったというよりはあの時から変わっていたのかもしれないんだけど、それは……。

「留姫、久しぶり」

「何、言ってるの、一週間前あったばかりじゃない」

「それでも久しぶりじゃん、ジェンや博和たちは同じ学校だからいつでも会えるけど」

「まあ、そうだけど……」

ジェンは？

「なんか用事あるから少し遅れるってさ」

「そう……」

そして僕らの間に沈黙が訪れる。

「あっ、あのさ」

留姫は最近どうなの？」

「どうって何がよ」

「ほら、中学に上がったし何かあったかなって」

「何かって？」

「その……、好きな人とか……いるのかなって」

「ばっ、ばっかじゃないのあんた」

普通そういうこと女の子に聞く？

そういうあんたはどうなのよ」

「ぼっ、僕は……」

これが僕らというより……僕の変った所である。

僕は留姫が好きだ、デジタルワールドや、デ・リーパーとの戦いを経て僕はいつしか加藤さんよりも留姫が好きになっていた。

加藤さんは確かに初恋の人だけれどもギルモンがいなくなってから
は「好き」の意味が違うと思った。

「何よ、じれったいわね……」

そう言い留姫が怒ったような顔をするのが好きだ。

笑ってる留姫はもっと好きだ。

「じゃあ留姫はどうなのさ」

「あたしは……」

そう言い留姫の顔がリングミたいに赤くなる見て「やっぱり」と僕は心の中で呟く。留姫は可愛い、それは留姫に恋している僕の主観じゃなくて誰が見てもそう思うだろう。

もともと可愛いかった留姫はモデルのお母さんに似て少しずつきれいな女の子になっている。おそらくそれを留姫にそう話しても怒られるだろうけど。

「留姫の好きな人ってどんな人？」

そう何気ないふりをして問いかけてみると……

「やあ、ごめんごめん、趙先生のところに用事あってさ」

「ジェン」

「じえ、ジェンも来たしこの話はこれでおしまい
さあ、定例の近況報告始めるわよ」

「わかったよ……」

そう僕は、渋々と引き下がる。

……
……

：

「やっぱりあんたたちのほうも進展なしみたいね」

「ごめん」

「こうしてデジヴァイスは残っているのにね」

「あたしの方も進展はなし」

この近況報告とは週に一度集まってデジタルワールドからの通信やデジタルフィールドがなかったかの報告会だ。

「とにかく、今日の定例会は終わり

また来週ね」

そう留姫の言葉を皮切りに今日の定例会は終わりを告げた。

留姫が行方不明になったのはこの日の夜だった。

第一話 プロローグ（留姫の場合）（前書き）

これは留姫視点の第一話です

大まかには啓人と同じですが細部は違います

第一話 プロローグ（留姫の場合）

デ・リーパーとの戦いから2年、あたしたちは中学生になった。哲人たちとはまた違う学校になったけど、あたしたちの関係は変わらない。

ギルモンホームにあった啓人が見つけたデジタルワールドは山木さんたちが危ないからとギルモンホームごとふさいでしまった。あの時の哲人は山木さん相手に掴みかかりたりして大変だった、もちろん私も抵抗したけど結局ギルモンホームはコンクリートに埋められてしまった。

あれから私たちは何も変わらない、たまに会っても相変わらず啓人は鈍感だしそして何より私たちはいつか必ずレナモンたちに会えると思っている。

けれどあれから、一つだけ変わった事がある。

あれから変わったというかあのときから変わっていたのかもしれないんだけど、それは……。

「留姫、久しぶり」

「何、言ってるの、一週間前あったばかりじゃない」

「それでも久しぶりじゃん、ジェンや博和たちは同じ学校だからいつでも会えるけど」

「まあ、そうだけど……」

ジェンは？

「なんか用事あるから少し遅れるってさ」

「そう……」

そしてあたしたちの間に沈黙が訪れる。

「あっ、あのさ」

留姫は最近どうなの？」

「どうって何がよ」

「ほら、中学に上がったし何かあったかなって」

「何かって？」

「その……、好きな人とか……いるのかなって」

「ぼっ、ぼっかじゃないのあんた

普通そういうこと女の子に聞く？」

「そういうあんたはどうなのよ」

「ぼっ、僕は……」

これがあたしたちというより……あたしの変わった所だと思う。

始めて会ったときは泣き虫で頼りなくて戦いもろくに出来ないやつだったのに

一緒にいるうちに少しずつ変わっていった、あたしも全部があいつのおかげじゃないと思うけどそれでも変われた。

「何よ、じれったいわね……」

そうあたしが怒っても困ったように笑う哲人が好きだ。

「じゃあ留姫はどうなのさ」

「あたしは……」

そう言われ言いよどむ、ここで哲人に好きだというのも気がひけるし、何よりそう言うことは男のほうから言ってほしい

「留姫の好きな人ってどんな人？」

そう何気ないふりをして問いかけてくる

こちらの気も知らずにすると……

「やあ、ごめんごめん、趙先生のところに用事あってさ」

「ジェン」

「じゃえ、ジェンも来たしこの話はこれでおしまい
さあ、定例の近況報告始めるわよ」

「わかったよ……」

そう哲人は渋々と引き下がる。

全く分かりやすいんだから。

「やっぱりあんたたちのほうも進展なしみたいね」

「ごめん」

「こうしてデジヴァイスは残っているのにね」

「あたしの方も進展はなし」

この近況報告とは週に一度集まってデジタルワールドからの通信やデジタルフィールドがなかったかの報告会だ。

「とにかく、今日の定例会は終わり

また来週ね」

そうあたしの言葉を皮切りに今日の定例会は終わりを告げた。

その夜、レナモンのことを思い出し夜に散歩といいレナモンと戦った場所を回ってみる。すると霧が立ちこむ。

「まさか、デジタルフィールド？」

霧の中からダゴモンが現れる、そしてそこであたしの意識は途絶えた。

第一話 プロローグ（留姫の場合）（後書き）

次から物語が始まります

第二話 留姫の失踪 行こうデジタルワールドへ（前書き）

これが二話目になります
実質3話目ですが

第二話 留姫の失踪 行こうデジタルワールドへ

「留姫が昨日の夜から帰っていないらしい」

そうジェンに告げられたのは今日の朝、どうやら夜に散歩していてそのまま行方不明になったらしい。

「それともう一つ、昨日の夜デジモンがリアライズしたらしいすぐに居なくなったみたいだけど」

「もしかして、留姫は……」

「だと思っ」

「じゃあどうすれば……」

そうだ、山木さんやジェンのお父さんに……」

そう言いかけると静かにジェンは首を横に振る。

「お父さんも試してはいるけど難しいってさ、山木さんの方も無理みたい」

「じゃあどうするの？」

「ゲートだよ、留姫がもし本当にデジタルワールドへ行ったのなら、どこかにデジタルフィールドがあるはずだ、だから僕たちでそれを探すんだ」

「でも、どうやって？」

「留姫が散歩していたところを探すんだ。」

ねえ、哲人は留姫が行きそうな場所ってどこだと思う？」

「留姫が行きそうな場所？」

何処だろう？ 散歩って言うからには近場だろうし、となると……

「ギルモンハウスかな？」

他にはレナモンと戦った場所とか？」

「うん、僕もそう思う」

「じゃあ、学校が終わったら手分けして探しに行こう」

「ああ」

放課後、僕らは事情を話し博和や健太、加藤さんと協力して留姫の手がかりを探し続けた。

けどどれだけ探しても雲を掴むように僕らは空回りするだけだった。「もうこんなに暗くなってきたし皆、両親が心配するんじゃないかな。」

留姫のことは心配だけど皆、今日は帰って明日にしないか？

幸いにも明日は土曜日だ、朝から探そう」

そうジェンが切り出して皆、散り散りに解散し今日の搜索は幕を閉じた。

そう僕以外は。

「留姫の行方が分からないのにおとなしく引き下がるなんて嫌だ、もしかしたらもう会えないかもしれないのにおとなしく引き下がれないよ」

そう言いたいのを我慢してそして走り出す。

何処を走っていたのかよく分からなかった、ただ闇雲にもう一度留姫に会いたくてそれだけを考えて走り続けた。

もう会えないかもしれない、それを考えるとギルモンたちと別れた時のように悲しかった。

牧野 留姫。僕の大好きな女の子、少し意地っ張りで、でもとても優しい女の子。

僕はこのとき留姫のことだけを考えて走り続けた。

「これは、デジタルフィールド……？」

気づけば僕の目の前にはあの霧が広がっていた、ポケットに入れたままのデジヴァイスが赤く光っている、そうまるでギルモンが呼んでるように。

「行こう、留姫の所へ」

そして、ギルモンの所へ

そう一歩踏み出すと突然腕を掴まれる

「おいおい、抜け駆けは無しだぜ哲人」

「博和」

「そうだって、水臭いぜ哲人」

「健太も！」

「どうやら皆、考えることは同じだったみたいだね」

「ジェン」

「行こうぜ、今度は俺たちがデジモンに会いに行くんだ」

「留姫を助けにだよ」

「どちらも同じさ」

これからデジタルワールドに行くんだ」

「そうだね、じゃあ行こうデジタルワールドに」

そして次あったら伝えようこの気持ちを留姫に

第二話 留姫の失踪 行こうデジタルワールドへ（後書き）

S 中途半端に甘ったるくないか？

A それは自覚してます

S 加藤さんの立ち位置は？

A まあ、追々分かるかと

S 今更ながら啓人が好きなのは樹莉では？

A 本編で「好きだった」と過去形なので

第三話 留姫の気持ち ハンギョモンの罠(前書き)

これで書き溜めてある分は終了です
次回は来月になります

第三話 留姫の気持ち ハンギョモンの罠

私は気がついたらデジタルワールドにいた。

空を見ればリアルワールド球があるからおそらくデジタルワールドだろう。

「レナモン」

とりあえず私は大声でレナモンを呼ぶがいつまで経っても返事は返ってこない。

「やっぱり返事はないか」

そうため息をつく、一応予想はしていたけどそれでもなんか空しい。「どうしようかな」

そう言いしゃがみこむ、そういえばデジタルワールドで一人きりになるのは初めてかもしれない。

「クルクルく留姫だクルく」

どうしてデジタルワールドにいるのですか？

「クルモン!？」

あたしは驚いて足元を見る、空耳じゃないやっぱりクルモンがいた。

「あたしも分からないわよ」

ただ、気づいたらここにいたの」

「その理由我が教えてやろう」

「誰!？」

そう声がしたほうへ振り向くとそこには見覚えのないデジモンがいた。

「わが名はハンギョモン、貴様は我が主の花嫁となるべくここに呼び出された」

「花嫁ですって!？」 冗談じゃない、誰がそんなもんになるって決めたのよ」

「我らが主だ、光栄に思え」

「信じられない、なんであたしが花嫁なのよ!? そんなの嫌に決まってんじゃない」

そう言いハンギョモンたちから逃げ出すが、レナモンも哲人もジエンもない、どうしたらいいのかわからないけど、それでも逃げ続けた。

「もはや、逃げ場はない、さあ、諦めて我らが主の花嫁となれ」

「いやよ、あたしには好きな人がいるんだから」

そうよ、こんなところで変な奴の花嫁になんかなりたくない。

けれど一步下がればそこは崖の下正直打つ手はないどうしたらいいの？

そう悩んでいたら足元の崖が少し崩れてしまいあたしはその一瞬、少しだけ諦めてしまおうかと思ってしまった。

「やっと観念したか、最初からそうしていればよかったものを……」

そう嫌な笑顔を浮かべながらハンギョモンたちが迫ってくる、私は目を固く閉じて哲人のことだけを考えていた。

けど、哲人は現れなかったその代わり……。

「狐葉楔!」

そう、私の危機を救ってくれたのはレナモンだった。

「大丈夫? 留姫」

「遅いわよ、待ちくたびれたじゃないの」

「すまない」

「でもありがとうレナモン」

「ルキ、再会を喜ぶのは後来るよ」

「うん」

そうレナモンに答えると私はカードを取り出す、レナモンたちと別れてからは辞めたけどそれでも、いつレナモンと出会っても良いよ

うにデジヴァイスと一緒に持ち歩いていた。

「カードスラッシュ」

高速プログラムH―ハイパースピード」

「は、速い」

「俺を踏み台にしたア!？」

一気にレナモンの速さが加速しハンギョモンたちを翻弄し、何体かは倒したがまだまだハンギョモンは残っている。

「何て数よ」

「下がれ」

突然の低い声にハンギョモンたちが恐れる。

「し、しかしダゴモン様、あやつは……」

「下がれといったのが聞けないのか」

「はっ」

そう言いハンギョモンたちは引き下がっていく。

「どういうこと？」

「分からない、ルキ、油断しないで」

ハンギョモンが道を開けそこからタコのようなデジモンが現れる

「ダゴモン、完全体の水栖獣人型デジモン、ウイルス種

必殺技は凄まじい腕力で、三つ又の鉾を投げつける『フォービドゥ

ントライデント』

完全体!？」

デジヴァイスに表示された言葉を読み驚く

「どうしてあたしが完全体のデジモンに追われなきゃならないのよ」

「勇敢だな、だが諦めることだ」

「誰が諦めんのよ。」

レナモン、いくよ」

そう言い一枚のカードを取り出す

「カードスラッシュ、マトリックスエヴォリューション」

『Matrix Evolution』

「レナモン進化」

レナモンの姿がキュウビモンになりそしてタオモンになる

「タオモン」

「行っけえ」

「弧封札」

タオモンが数枚の札を投げて攻撃するがダゴモンには全く通用しない

「今度はこちらの番だ」

フォービドゥントライデント」

「くっ……!!」

タオモンが必死に結界を貼って防御するがダゴモンの投げた槍の勢いは殺しきれなかった。

「こうなったら、いくよタオモン」

マトリックスエヴォリューション」

そう高らかに叫ぶが何も起こらない

「マトリックスエヴォリューション」

もう一度叫ぶが何も起こらない

「無駄だ、かつてのお前と変わってしまった今ではもう融合は出来ない」

「変わったって何がよ」

そうダゴモンを睨む

「レナモンと会えないことを受け入れ大人になりかけてる今のお前ではもはや昔とは違うのだよ」

「そんなことない」

そんなこと……」

だがあたしの悲痛な声とは裏腹にタオモンは傷ついていった。

「タオモン!!」

そうタオモンの名を呼ぶことしかできない今のあたしが憎い、惨めでそれでも啓人が来てくれるって考えてるあたしが嫌いになる。

「留姫、大丈夫」

すぐに終わらせるから」

「ほう、その姿で良くそのようなことが言えるな」

面白い」

「はああああああ」

タオモンが光の柱になりそしてそのままダゴモンに突撃する。

「やらせはせん」

そうこのままダゴモンを倒せると思っていた、けれど予想は大きく裏切られあたしの目の前にはハンギョモンの不意打ちによって瀕死のレナモンだけが映っている。

「レナモン」

私は急いでレナモンの所へ駆ける

「死なないでよ、せっかく会えたのに」

泣きじゃくりながらレナモンにそう伝える

「まだ、あえてほとんど時間経ってないじゃない

勝手だよ、またあたしを残していくなんて」

どっちが勝手かなんて本当は分かってる、けれど溢れる気持ちが止まらない。

「大丈夫、私は留姫のそばにいるよ」

「そんな死んじゃうみたいなこと言わないでよレナモン」

そう言うレナモンは白く光り、そしてレモンのような小さなデジモンが残った

「レナモン！！」

私は嬉しくてそのデジモン、レレモンを抱きしめる

「喜んでいるとこ悪いが、まだ決着はついていない」

そう言いながらダゴモンが後ろに立っていた

「だが、我が配下が邪魔をしたな

今回の勝負はあずけておく

次までにはもっと強くなれ」

そう言いダゴモンは去っていった。

「終わったの？」

「いいえ、まだこれからですよ」

突然聞こえた冷たい声に驚き当たりを見回す、すると黒い翼の墮天

使型デジモンがそこに居た

「デビモン

成熟期のウィルス型の墮天使デジモン

必殺技は自由に伸び縮みする腕で相手の心臓^{デジコア}をわしづかみにするデスクロウ」

「よくご存知で、いえ、その玩具の力でしたね

ですが分かっててもかわせなければ意味がない、デスクロウ」

デビモンにいきなりつかまれて意識が遠くなっていく……

第三話 留姫の気持ち ハンギョモンの罠（後書き）

はい、最後にデビモン登場です

そして、レナモンは死なずレレモンに

なお邪魔をしたハンギョモンはダゴモンにロードされました

第四話 再会と新たる戦い 激突オオクワモン（前書き）

長くなりすぎたので今回二話に分けました
後半はいつになるかわかりませんがまたアップします
気長にお待ちいただければ幸いです

第四話 再会と新たる戦い 激突オオクワモン

落ちていく……

あの日、初めて僕らがデジタルワールドに行ったように落ちていく。
1と0の世界、デジタルワールド

けれど、僕らは知っている、デジモンは1と0じゃ表せないくらい
大切な存在で強大な存在ということを……

「痛てて……」

僕らが落ちてきたのはかつてと同じ荒野、ただ前と違うのは僕らの
隣に留姫がいないこと

そしてギルモンもテリアモンも……。

「さすがにいきなりは出会えないみたいだね」

そうジェンがため息混じりに告げる。

「そりゃ、そうでしょ」

留姫のことだから絶対動き回ってるよ

留姫はレナモンと会えたのかな？」

「どうかな？」

僕らのパケットが届いたのかもわからないし」

「でも会えてたらいいね」

そういう僕らは歩き出す、この懐かしいこの世界を……

そして少し歩いていると少し遠くにデジモンの群れを見つける

「ジェン」

「ああ」

「ちよつとタカト」

「俺たちも忘れんなよな」

そう、ヒロカズたちが話しかけてきて苦笑する

「ごめん、ごめん」

「タカト、あの群れ」

「うん」

「どうする？」

「逃げようか？」

そうジェンの言葉にヒロカズたちは不安そうにする

「いや、大丈夫だよ」

「へ？」

総じえんお声に僕は啞然とする

「え？ どうして？」

「だってほら」

そう言いジェンが指を指すとそこにはギルモンたちがいた

「ギルモンっ！！」

「タカト久しぶり」

そう相変わらず変わらない口調でギルモンは僕の名前を呼ぶ。

そして再会を喜んでいるのは僕だけじゃなくヒロカズやジェンも一
緒だった。

「ねえ、ギルモン

レナモンは？」

そう落ち着いてきたところでギルモンに問いかける。

「ギルモン分かんない

レナモン、昨日の夜からどこかへ行ってる」

「っ！？ ジェン」

「ああ」

そうギルモンの話を聞きジェンに声をかけるとジェンも聞いているのか頷く、ヒロカズとケンタは久々のパートナーとの再開に感動して話を聞いていない。

「でも、ジェン

今のここは危険だよ」

「危険ってどういうこと？」

テリアモンの言葉に問いかける僕

「四聖獣がデ・リーパーとの戦いに疲れて休んでる間にデビモンや

ヴァンデモンがこの世界で暴れ始めたんだ

そのせいで今のデジタルワールドはめっちゃくちゃなんだ」

「ジェン、もしかして」

「ああ、留姫が危ない」

「そうだった、なあガードロモン留姫見てないか？」

そう今更ながらヒロカズが気づいたように驚く

「見てない」

「そっかあ」

そう落胆する

「でもレナモンも居ないんだよね」

「でも、もしかしたら留姫と合流してるかも」

「うん、そうだね」

そうジェンが苦笑する、わかっている僕だってそんなのは希望的観測だってこと、でもジェンはそれを否定せずに頷いてくれた

「そうそう、なんとって留姫はデジモンクイーンだからな」

そうヒロカズが付け足す

「ジェン、危ない」

そういきなりテリアモンが叫ぶと灰色がかった紫の大きなクワガタのようなデジモンがジェンに襲いかかる。

「オオクワモン、ウイルス種の昆虫型デジモン

クワガーモンが規則的進化をした形態。最大の弱点だった防御力が強力になり、触角にはリーダーがついた。そしてハサミの攻撃力も進化前と比べ大幅にパワーアップした。ライバルのアトラカブテリモンが騎士道精神を身につけたのに対し、こちらはより攻撃的な乱暴者

必殺技は大きなハサミを使い、ダイヤモンドをも真っ二つにしてしまふシザーアームズΩ

こいつは……完全体だ」

そうジェンガデジヴァイスを見ながら告げるがそのオオクワモンが数十匹と現れる

「こんなに多いだなんて……」

「ギルモン、タカトとデュークモンになってやっつける」

「そうだね、行こうギルモン」

マトリックスエヴォリューション」

そう僕は高らかに叫ぶが何も起こらない

「え？ マトリックスエヴォリューション」

もう一度叫ぶがやはり何も起こらない。

「どうして？」

ジェンの方を見るがジェンも戸惑うように究極体にはなれていなかった。

「タカト、今は完全体だ」

「うん、カードスラッシュ」

マトリックスエヴォリューション」

「ギルモン進化、メガログラウモン」

ブルーカードをスラッシュすればギルモンはグラウモンになり
メガログラウモンへと進化する

「アトミックブラスター」

「ゴールデン・トライアングル」

メガログラウモンやラピッドモンが善戦するがそれでも数は多い
ヒロカズやケンタはオオクワモンの撃退で手いっぱい援軍は望め
ないだろう。

「ジェン」

「ああ、こうなればやるしかない」

そうジェンは一枚のカードを取り出す。

「カードスラッシュー！！」

攻撃プラグインA―Absolute attack」

ラピッドモンの攻撃力をアップさせるオプションカードで一気に
ジェンは殲滅を図る。

「僕もいくよ」

カードスラッシュ

高速プラグインH―ハイパースピード

メガログラウモンハンマーエッジだ」

そうメガログラウモンに叫べばメガログラウモンは飛び立ち擦れ違いざまにオオクワモンを切り裂いていく。

「やった」

オオクワモンの大群が引き返しはじめ僕とジェンは互いにハイタッチをして喜んでいた。

しかし、この時は完全に油断していたオオクワモンの撤退は実は、後に来る究極体の前兆だったということを。

第四話 再会と新たる戦い 激突オオクワモン（後書き）

感想をくれた方ありがとうございます
再び書く気力がもらえました

第五話 現れる究極体 強敵グランディスクワガーモン（前書き）

大変お待たせしました

これからも不定期になると思いますので

何卒ご容赦ください

第五話 現れる究極体 強敵グランディスクワガーモン

「あいつら逃げていくのか……」

「やったぜ、俺たちの勝利だ」

そう撤退を始めるオオクワモンを見てヒロカズが嬉しそうに告げる。

「いや、違う」

あいつらが撤退して行くのはきっと違う理由だ」

そう険しい顔でジェンはヒロカズに告げる、そして、それは僕もまた漠然と感じていた感覚だった。

「うん、僕もそう思う」

「でもあいつら逃げているぜ」

そう、ケンタも言うが僕には不安は消えなかった。

「ヒッ、ヒロカズ」

「なんだよ、ガードロモン」

そうヒロカズがめんどくさそうに言いながら振り返るとようやく気付いたようだ僕らの目の前に現れた敵の存在に

「グランディスクワガーモン」

グランクワガーモンの一部の強者が進化した究極体。希少で、その存在が確認されたことがほとんどない。両手の「グランキラー」には傷を付けられぬモノは無い。

必殺技は頭部のハサミで敵を締め付けるグランディスシザーと両腕のツメで敵を切り裂くグランキラーだ」

「究極体!？」

それでも行くよ、メガログラウモン」

「おう」

アトミックブラスター」

「僕たちも、いこうラピッドモン」

「うん」

ゴールデン・トライアングル」

だが、僕らの攻撃もむなしく爆炎の中からはキズ一つないグランディスクワガーモンが襲ってくる。

「ラピッドファイア」

そして、ラピッドモンが崖を撃ちそしてグランディスクワガーモンはがけ崩れに巻き込まれた

「このままじゃ、ダメだ、啓人

このままだと僕は勝てない。

おそらく、今の時間稼ぎにしかないはずだ。早く、なんとかして逃げる方法を考えるんだ」

ジェンがそう言い僕は何かないかと当たりを見回す

「何、言ってるんだよ。

敵前逃亡なんてカッコ悪い真似出来るわけないだろ」

「いや、ヒロカズ、ジェンの言うとおりだ

負ける戦いと負け戦は違うよ」

「話はまとまったね

じゃあ、あの光の帯に逃げるよ」

そういえば僕らにとっては見慣れた光の帯を指さす。

「どこにつくかはわからないから皆、離れないようにね」

そう言うヒロカズ以外の全員が頷く

「俺はそういうわけにはいかねえ

行くぞ、ガードロモン」

「分かった」

そう言うヒロカズとアンドロモンは走り出す。

「待って」

だが、僕の声をかき消すようにガレキの中からグランディスクワガーモンが現れる。

「間に合わなかったか」

そして、グランディスクワガーモンは僕らを見つけるとそのまま突撃してくる。

「もうダメか」

死を覚悟し瞳をとじたその瞬間グランディスクワガーマンに一発のミサイルが直撃した。

「この攻撃は……？」

「タカト、ジェン、ケンタ、こいつは俺が惹きつけておく。その隙にお前らは逃げろ」

「だけど……」

「大丈夫だよ、俺は最強のデジモンテイマーなんだぜ」
「そう言い宏和はカードを見せる。」

「行くよ、哲人」

ヒロカズが作ってくれたチャンスを逃がしてはいけない」
そのジェンの声を皮切りに僕らは光の帯の中へと飛び込んだ。

第六話 絶体絶命!? 追撃のクイーンチェスモン（前書き）

話数のミスがありました 失礼しました

連休中になんとか7話まではプロットできたのですがちょっと雑か
もです。感想いただけると嬉しいです

第六話 絶体絶命！？ 追撃のクイーンチェスモン

暗い城の中吸血鬼のようなデジモンと仮面をつけた黒いゴシックドレスのような服を着た少女が話している。

少女は薄黄色の髪をツインテールに結って吸血鬼のようなデジモンに跪いている。

「ほう、どうやら、招かねざるティマーたちもこの世界に来たらしい。そこでティマーの相手は同じティマーである君に任せたいのだがいいかな？」

「はい、ヴァンデモン様。あなたの命令とあれば喜んで行くよ、ヨウコモン」

「ああ」

そう一言だけ言うのと仮面の少女は紫の九尾の狐に乗ってどこかへと去っていく。

「なんとか逃げ切れたみたいだね」

「でも、ヒロカズが……」

「大丈夫だって、ヒロカズも言ってただろ」

『俺は最強のデジモンティマーだ』って

タカトは知らないと思うけどさ、アイツいつまたデ・リーパーみたいな奴らが現れても大丈夫なようにいろいろ考えてたんだ。

『1年半前はいつもタカトたちに一番大変な役をやらせていたから、今度はお荷物にならないように俺も強くなるって』

だから大丈夫。ヒロカズはうまくやっているはずさ」

「なんにしても今のままじゃ、僕らは究極体には勝てない。

それに少し休憩しよう。先程の戦いでもテリアモンたちも疲れているみたいだしね」

「じゃあ、あそこで休もうよ。あの大きな木の下ならゆっくり休めるし」

そう僕が言うのと僕ら3人は木陰に向かいそして休憩を取る。

「タカト、お腹すいた」

「そうだね、ギルモン。 ジェン」

「そうだね、じゃあ、昼食にしようか。 ちょうど話したいこともあるし」

ジェンは、僕が言おうとしていたことが分かったようにそう言い微笑する。

「話したいこと？」

「うん、僕らが今、究極体になれない理由さ」

「え？ 分かったの？」

「あくまで仮説だけどね」

ジェンは苦笑して続ける。

「逆に考えてみたんだ。 なぜ僕らは以前、完全体になれたのかをそして、おそらくだけどそこに答えはあった。」

タカト、あの頃の僕らと今の僕たち、何が違うと思う？」

「え？ えっと……」

「言い方を変えるよ。 今の僕らにあって、去年の僕らになかったものは？」

「もしかして……!？」

「ケンタ、わかったの？」

「ああ、たしかに僕らなら仕方がないのかもしれないな」

「僕らなら？」

「そう、あの戦いを経験した僕らにあって、そうじゃない人たちに
はないもの。」

いや、ある意味その逆だね。

あの戦いを経験して僕らが失ってしまったものと言ってもいい」

「……っ!？」

もしかして!？」

「そう、純粋な気持ちさ。」

本来僕らはまだ持つてゐるはずだったんだ

でも初期の山木さんの考え方や大人たちとの意見の違い

デ・リーパーとの戦いを経験して、そしてそれからの毎日を生きて僕らはこの世界がどれほど汚れているかを知ってしまった」

「つまり僕らはあの大人にならざるを得ない状況をいくつか経験したから究極体に、ギルモンたちと一つになれないってわけ？」

「おそらくね。僕らはあの戦いで多くのことを経験したそれがきつと成長しすぎてデジモンが追いつけていないのかも」

「だとすると、どうすればいいのかな？」

「とりあえず、四聖獣に会おう。もしかしたらなんとかなるかもしれない」

「そうだね、じゃあ行こうか」

そう言い立ち上がるといきなり近くが爆発する。

「敵襲？」

そう言いあたりを見回すとそこには黒い細身のデジモンが立っていた。

「クイーンチェスモン。ウィルス首、究極体。

長射程、超攻撃力を持つチェスモンシリーズ最強のデジモン。必殺技は甲冑に仕込まれた剣で敵の急所を貫く『ハートブレイカー』とクイーンスティックで敵を叩き砕く『グランドクリケット』」

「また究極体……」

「今度は誰が囷になる？」

「もう誰も犠牲になんてできない。僕らが倒すんだ。

行くよ、ギルモン。完全体でもカードがある」

そう言い僕は一枚のカードを取り出す。

「カードスラッシュ、マトリックスエヴォリュション」

そう言いカードはいつの間にかブルーカードとなりギルモンをメガログラウモンへと進化させる。

「タカト僕も戦うよ。」

カードスラッシュ、マトリックスエヴォリュション」

そう言いジェンもブルーカードでテリアモンをラピッドモンへと

進化させる。

「カードスラッシュ、高速プラグインH」

「カードスラッシュ、攻撃プログラムA」

「メガログラウモン、速さでかく乱しつつ攻撃」

「ラピッドモン、攪乱しつつメガログラウモンのために隙を作ってくれ」

だが、そんな僕らの作戦も究極体の力の前には無力だった。

「こいつ、力だけじゃなく速い」

「ジェン、回避するので精一杯隙なんて、見つからないよ」

「なっ！？　なんだよ、あれ」

そう言いケンタが驚いて光の帯を指差す、そこから幾千ものオオクワモンとそしてグランディスクワガーモンが現れた。そしてひらりと何かが風に流されこちらに飛んできた。何かじゃない、それはヒロカズの帽子だった。

「やっぱりヒロカズは……」

「言うな、まだそうと決まったわけじゃない」

「でもこれは……」

「それでもだ!!」

ジェンの怒鳴り声にケンタは一言「すまない」とだけ呟く。　そうだ、辛いのは僕だけじゃない。ジェンも辛いんだ。

「それでも、僕は……」

そう小さくつぶやいて憎い相手を見る。

「タカト、こっちは僕に任せて君はオオクワモンを……」

挟み撃ち医にされるのだけは回避したい」

「分かった。　メガログラウモン!!」

「ああ」

「そっちは任せたよ」

僕らは単身オオクワモンの群れに向かって特攻していく

「ダブルエッジ」

メガログラウモンの腕が振るわれるたびに一体、また一体とオオクワモンが光になっていく

「アトミックブラスター」

そしてメガログラウモンの技で一気にオオクワモンの半数が消滅したその時僕は何か違和感を感じた、でもそれがグランディスクワガーモンがいけないことと気づくのは少し遅すぎた。

そして僕がそれに気づいたときには既に奴は頭上にいた。

「っ！？　ダメだ」

「ダブルインパクト」

聞き覚えのある声と銃声で僕の頭上にいる敵は腹部に大きな穴を空けて落ちていきそして消滅した

「ベルゼブモン！？　」

「オオクワモンの群れがいたから何かと思えばお前たちだったか」

「そんなことより、こっちはもう大丈夫だから、あっちに行つて、あっちでもジェンが究極体と戦つてて……」

「分かった、お前はこいつ頼む」

「そう言いベルゼブモンが投げ渡したのは……」

「クルモン！？　」

「後で話す、お前らの方も聞かせろよ」

そう言うベルゼブモンはベヒーモスに乗ったままジェンのいる方向へと走っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4162t/>

デジモンテイマーズ あらたなる闘い

2011年11月11日08時01分発行